

## 平民宰相 原敬の生涯

### 1. はじめに

大正7年(1918年)9月29日、日本初の政党内閣が設立された。これを成し遂げたのが明治後期から大正にかけて活躍した類まれな政治家、原敬である。彼には「平民宰相」として極めて高い評価がある一方で、官僚・軍閥勢力と妥協をしながら政治を進める「漸進主義者」という冷めた見方もあったのである。時はちょうど第一次世界大戦から、米国の台頭、欧州の地盤沈下、ロシア革命、社会主義国家ソビエト連邦の誕生と激動の時代を迎えていた。原はその中であって政治・経済・軍事・外交と様々な難題に取り組みながら日本の舵取りをしなければならなかったのである。今回は丁度没後百年になる原に焦点を充てて、縦横無尽の活躍を通して彼の真の姿に迫ってみたいと思う。

### 2. その生い立ちと苦難の青年時代

原敬は、1856(安政3)年2月9日、陸奥国盛岡藩本宮村で盛岡藩士原直治の次男として生まれた。原家は祖父直記の代に大いに栄えて家老格となったが、父直治は51歳で病没し、家運は傾いてゆくのであった。1868(明治元)年、戊辰戦争が勃発し会津落城の後も盛岡藩は戦闘を続けていた。「朝敵」となった盛岡藩は20万石から白石13万石へ転封されたが、翌年70万両の政府への献金を条件に盛岡知藩事に復帰した。しかし、献金の見通しは立たず廃藩置県の1年前に自ら廃藩願いを提出して政府直轄の盛岡県となっていたのである。こうした混乱の中であって原は翻弄されていたのである。

1870(明治3)年1月、原は再開された藩校作人館に入り、漢学や国学などを学んだ。翌年12月、旧藩主南部利恭が盛岡の青年教育のために設立した共償義塾という英学校に上京、入学した。問題は学費で母リツが母屋の大半を売り払って何とか工面していたのだが、賊が実家に侵入して送金が途絶えてしまったのである。親戚筋などからの援助も断って結局やめてしまったのであった。1872(明治5)年4月、原はカトリック神学校に入学した。この学校はフランス人宣教師マリンが開設したもので、そこには日本人学生が食費等を支給されて寄宿していたのである。翌1873(明治6)年4月、横浜のエブラル神父宅に寄寓し、ここで洗礼も受けた。洗礼名は「ダビデ・ハラ」である。翌年、エブラルの新潟での布教活動に学僕として同行した。この間、エブラルからフランス語や世界への見聞を広めたのであった。

1875(明治8)年6月、新潟から戻った原は分家して戸主となった。士族から分家して平民籍となったのである。この時、若干19歳であった。有名な『原敬日記』の書き出しは「翌年にいたり余就学の事に関し、別に考えもあり、又分家別戸するの必要

も生じたれば、かたがた帰省せんと欲し」で始まるのである。相当の決意を持って人生を再スタートしようとしたのだらうと思われる。帰京すると元幕臣箕作秋坪の三义学舎に入って受験勉強に励み、海軍兵学校や外交官養成機関を受験したが失敗したという。ようやく1876（明治9）年7月、司法省法学校に合格できた。彼は2番で入学したが、賄征伐事件に関係した廉で退校処分となってしまう。その後、中江兆民の仏蘭西学舎を経て1879（明治12）年、同郷の先輩の伝手で郵便報知新聞社に入社したのである。新聞記者時代には全国周遊の旅なども経験したが、明治14年の政変で大隈重信が下野し同社を買収したため、彼らとの折が合わず原は退社した。その後、御用政党の立憲帝政党の機関紙『大東日報』に迎えられたが、新聞は不人気で売れず8か月で同社を去ったのであった。

### 3. 官僚時代の原敬

1882（明治15）年11月、原は外務省御用掛勤務として採用された。原を世話したのは井上馨外務卿だったようだが本当のところはよくわかってはいない。この年の8月に原は下関まで記者として井上に同行している。前月の7月に壬午事変が起きて朝鮮の日本公使館が襲撃されるという事件が起きていたのである。採用時は公信局に配属されたが半年後には、官報を扱う文書局に異動した。そして、翌1883（明治16）年12月、天津領事に任命され同地へ向かったのである。ちょうど清国とフランスがインドシナを巡って対立しており、仏語の能力が必要とされた人選であったのであろう。天津には清国の実力者李鴻章がいて、彼らとの折衝を通して原の外交感覚も研ぎすまされていたものと思われる。清仏戦争の清の敗北を受けて、金玉均はクーデターを実行したがこれは失敗した（甲申事変）が、この後始末に天津で交渉が行われることになり、伊藤博文との会談が設定された。この結果、1885（明治18）年5月、天津条約が締結されたのである。この時、原は初めて伊藤に会ったのである。

1885（明治18）年5月、原はパリ公使館勤務を命じられた。パリ駐在は足掛け4年に及んだ。欧州情勢の研究・分析に労力を費やすことになったと思われる。1888（明治21）年、帰国して農商務省参事官となったものの、薩摩閥の次官前田正名が省内を掌握しており、原の出番はなかった。だが、1890（明治23）年5月、陸奥宗光が農省務大臣になって赴任したのである。これが後の原を形作る重要な転機となったのであった。

陸奥宗光は紀州藩出身で坂本竜馬率いる海援隊にも所属し幕末維新には大いに活躍した。しかし、西南戦争の際に土佐立志社の一部と政府転覆を計ったとして宮城集治監に投獄され、特赦の後伊藤博文は外務省に登用していた。陸奥は前田一派を追放する一方で、原に省内の運営を任せただけであった。陸奥外相のもとで、重要な事件が頻発している。1894（明治27）年、朝鮮で発生した東学党の乱は日清両国の対立を誘発して、翌年日清戦争の開戦に至った。清国を圧倒した日本は下関で講和会議が開催されて、賠償金のほか朝鮮の独立、遼東半島・台湾の割譲などを獲得した。しかし、南下政策を推

進するロシアはドイツ、フランスとともに同半島の返還を要求してきたのである（三国干渉）。結局のところ、その要求を受けざるを得なかったのであった。原は陸奥と行動を共にしていたが、その陸奥も 1897（明治 30）年 8 月、肺患によって死去したのであった。

#### 4. 政党政治家、原敬

陸奥の死後、原は日銀大阪支店長片岡直輝<sup>かたおかなおてる</sup>や北浜銀行頭取岩下清周<sup>いわしたきよちか</sup>の勧めで大阪毎日新聞社に入社し、翌年社長に就任した。次に当時の日本における政党の歩みについて見ていくとしよう。明治 14 年の政変の後に板垣退助は自由党を、大隈重信は立憲改進黨を結成した。いずれも熱気溢れる急進派政党であり、理論闘争に明け暮れていた。藩閥政府もこれに対抗して立憲帝政党を設立し、原もこれに加わったが失敗に終わった。自由党と改進黨が 1898（明治 31）年、合同して憲政党を結成すると、伊藤博文は政党の必要性を意識して翌年から地方を遊説したのち 1900（明治 33）年、立憲政友会<sup>りっけんせいゆうかい</sup>を組織したのである。原は伊藤と井上馨から勧められて入党した。立憲政友会のもとには伊藤総裁、伊藤系の人脈として西園寺、原を始め多数の官僚が参加した。また、旧自由党系の憲政党からも星亨<sup>ほしとあきら</sup>、松田正久<sup>まつだまさひさ</sup>ら 152 人の代議士もはせ参じてきたのである。政友会はその後 1940（昭和 15）年に解散するまで政党政治の原点であった。

山県内閣は総辞職して、同年 10 月 19 日、第 4 次伊藤内閣が成立した。その閣僚の逋信大臣星亨が東京市会汚職事件で辞職したため、その後任として原が指名された。政党政治家としての歩みを進めた原であったが、早くから獵官運動、ポスト要求など現代に繋がる悪しき風習と対峙しなければならなかったのである。伊藤内閣崩壊後に政友会の実力者星亨が暗殺されて、党の実権は原と松田正久に移っていった。1902（明治 35）年 8 月に行われた衆議院選挙に原は盛岡市から立候補して初当選している。これより政治家としての歩みを始めることとなった。

この時代、社会は 1889（明治 22）年に町村制は合併して近代町村に統合された。300 年来の伝統を捨て去ることは困難であった。中央では藩閥対政党という対立があったが、その一方で地方では近代町村の中に対立の火種を抱え込んでいたのである。だが、社会の対立は次第に収まりつつあり、もっぱら関心は殖産興業へと変わっていった。地方も「熱血壮士」から「地方名望家」へと主役は交代してゆくのであった。このような日本社会の変革を背景として、政党政治家原敬はその歩みを進めたのである。

第 4 次伊藤内閣辞職のあと、山県閥の桂太郎<sup>かつらたろう</sup>が内閣を組織した。伊藤は政友会総裁であったが元老でもあり、詔勅をもって 1903（明治 36）年、枢密院議長に祭り上げられた。その後任には西園寺公望<sup>さいおんじきんもち</sup>が 2 代目総裁に就任した。桂は政局の安定のため、政友会との連携関係を希望し、原と交渉を進めている。ちょうど日露戦争が勃発しており、政友会も政府に協力した。ポーツマス日露講和条約ののち、1905（明治 38）年、12 月、桂内閣は総辞職して約束通り西園寺に大命が下った。この内閣に原は内務大臣として参

加している。この内閣は総理を除いて政友会は原内務大臣と松田司法大臣の2人に留まった。この後、桂と西園寺（政友会）の間で3回の政権の受け渡しが行われたが、それには原が中心に関わっていたのである（桂園時代）。当時の内閣は首相が西園寺でも藩閥官僚や山県閥が多数入閣していた。その中で原は第1次、第2次西園寺内閣、第1次山本権兵衛内閣と3度内務大臣として起用されたのであった。

## 5. 平民宰相、原敬

1914（大正3）年3月、シーメンス事件によって山本権兵衛内閣は総辞職して元老会議の奏薦をもって77歳の大隈重信に大命が下った。当時の元老会議は山県有朋、井上馨、松方正義、大山巖から成っていたが、伊藤博文亡き後は山県こそが最大の実力者であった。山県は桂が創設し加藤高明（外相）が党首を務める立憲同志会と、尾崎行雄（法相）の中正会を与党に政局運営にあたらせた。一方、野党で衆議院の過半数を有する立憲政友会でも、西園寺公望の後を継いで、原敬が第3代総裁となったのである。

1914（大正3）年7月、ヨーロッパにおいて第一次世界大戦が勃発した。その中で外相の加藤高明は中国・満州の権益確保を狙って、袁世凱政府に対華二十一ヶ条要求を突き付けて欧米の不信を引き起こしたのだ。これに対して原は対華要求などもっての外で、将来的には日本の外交的孤立を招くとし、国際協調特に米国との関係を重要視していたのである。軍閥・藩閥の総帥である山県も原の考えに近く、その後両者は次第に接近してゆくのであった。1916（大正5）年10月、大隈の後元老会議は山県閥の寺内正毅を後継首班に指名した。翌年ロシア革命が起こりソビエト連邦が成立したことで状況は一変する。これまで進めてきた日露協約を軸に展開してきた外交戦略が完全に崩壊した。また、後のシベリア出兵を見越して米価が高騰し1918（大正7）年、富山県中新川郡西水橋町（現富山市水橋）にて襲撃事件が起きたのである（米騒動）。これが全国に波及し、事態に対応できなかった寺内内閣は総辞職し、山県も後継の人選をあきらめて、ついに原の出番となった。1918（大正17）年9月29日、原内閣は成立した。原が政党の党首であるうえに、陸・海・外のほかの閣僚はすべて政友会員であったため、これを我が国最初の政党内閣と呼ぶのである。原の学費の工面に奔走した母リツはこの勇姿を見ることなく4年前にこの世を去っていた。

原の外交政策は対英米協調主義への転換に表される。これには経済的競争力の強化が不可欠であり、「四大綱領」を発表したのである。基本方針「教育の改善」「交通機関の拡充整備」「産業の振興」「軍事力の充実」を打ち出して、様々な施策を実行しようとした。この中でも鉄道建設についてはことさら熱心であった。1872（明治5）年、新橋・横浜間の開通を機に鉄道敷設要求は全国に満ちていた。すでに幹線は完成していたが、地方振興を名目に、後藤新平の広軌鉄道論も退けて狭軌のまま地方路線の整備を推し進めたのである（我田引鉄）。これは政友会の「党利党略」でもあった。この代表的な例が岩手県内陸と沿岸部を結ぶJR大船渡線だったのである。

次に選挙権の拡大の問題に触れてみよう。1919（大正8）年3月、選挙法を改正して、小選挙区を導入する一方、国税10円以上の選挙人資格が3円以上に引き下げられた。これにより有権者数は142万人から306万人に倍増したのである。1920（大正9）年2月に憲政会などから普通選挙制度導入案が提出されると、衆議院を解散して総選挙に打って出て大勝した。原もいずれは普通選挙は不可欠とはみていたが、まだその時期が到来していないと推察する。従来の有権者層である自作農、小地主に加えて普選になれば都市の労働者、小作農などが加わることになり、政友会の政策実現には困難になると考えていたと思われるのである。この点は山県とも共通し、彼ともうまく連携しながら政策遂行にあたったのだった。

## 6.原の突然の死（原敬暗殺事件）

1921（大正10）年、11月4日夕暮れ、京都で開催される政友会近畿大会に出席するため、東京駅へ向かった。午後7時20分、彼は丸の内改札近くで刺殺されたのである。ほぼ即死状態で65歳の生涯を閉じたのであった。犯人は18歳の国鉄大塚駅職員の中岡良一<sup>なかおかこういち</sup>である。これ以前に警視庁も暗殺の噂を聞きつけており、警護を強化しようとしていたが、本人は「いくら嚴重に警護してもらっても、やられる時はやられるよ」と言っていたそうである。右翼団体など背後関係も噂されたが、ついに明らかにはならなかった。この事件を契機に類まれな政治家原を失った日本は、せつかくの政党政治が輝きを失い、山県を筆頭とする藩閥・官僚組織とのパワーバランスを欠き、ひいては軍部の暴走へひた走ってゆくことになった。東京駅の丸の内南口に原首相暗殺を記したプレートと黒い目印がある。ここに佇むと、もしこの事件が無ければ昭和史も随分と変わっていたのではと失ったものの大きさを痛感すると共に、現在のコロナ禍での困難な状況を顧みてこれを未来への貴重な教訓となることを願いたい。（完）

### 【参考文献】

「原敬 日本政党政治の原点」（季武嘉也著：山川出版社）

「列伝・日本近代史」（楠精一郎著：朝日選書）

「ふだん着の原敬」（原奎一郎著：中公文庫）

「原敬と山県有朋 国家構想をめぐる外交と内政」（川田稔著：中公新書）

「山県有朋」（半藤一利著：ちくま文庫）

「山県有朋と明治国家」（井上寿一著：NHKブックス）

「大正デモクラシー」（今井清一著：中公文庫）

「真実の原敬」（伊藤之雄著：講談社現代新書）

この他、盛岡市の原敬記念館及びウィキペディアの資料を参考にした

資料の写真は17,21については筆者が撮影したが、他はウィキペディア並びに原敬記念館、後藤新平記念館、江戸東京博物館の後藤新平展、(株)ユーハイムのHPの資料からも掲載した



資料 1 : 青年時代



資料 2 : 外交官時代



資料 3 : 政治家時代



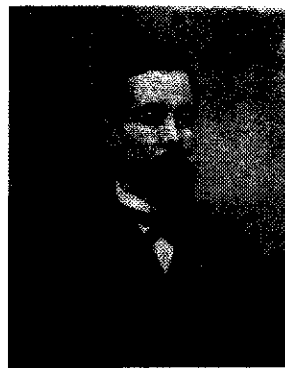
資料 4 : 平民宰相



資料 5 : 伊藤博文



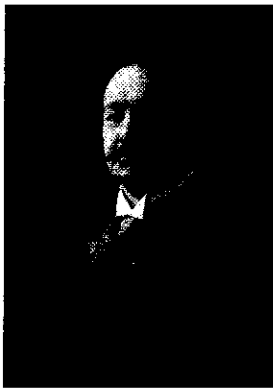
資料 6 : 山県有朋



資料 7 : 陸奥宗光



資料 8 : 井上 馨



資料 9 : 桂 太郎



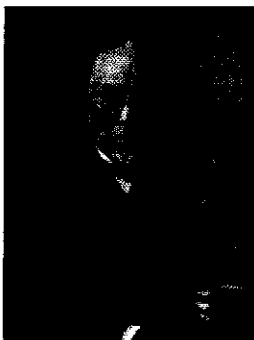
資料 10 : 西園寺公望



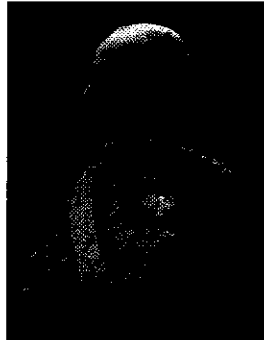
資料 11 : 大隈重信



資料 12 : 中岡良一



資料 13 : 後藤新平



資料 14 : 児玉源太郎



資料 15 : K・ニューハイム



資料 16 : エリーゼ



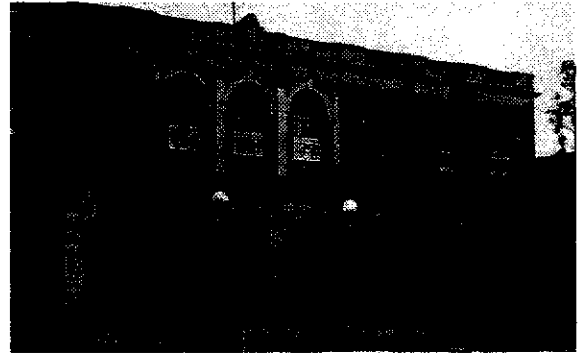
資料 17 : 原の生家



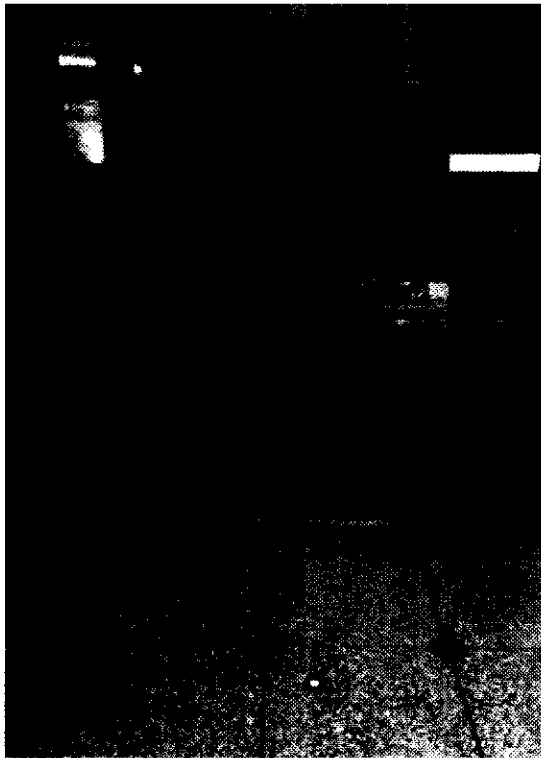
資料 18 : シベリア出兵



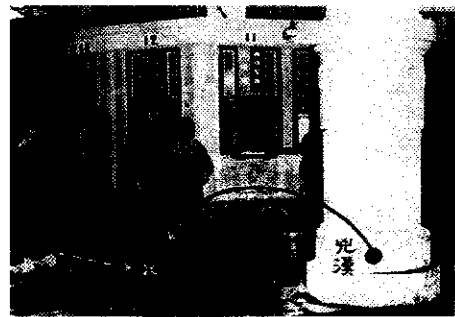
資料 19 : 米騒動



資料 20 : 立憲政友会本部



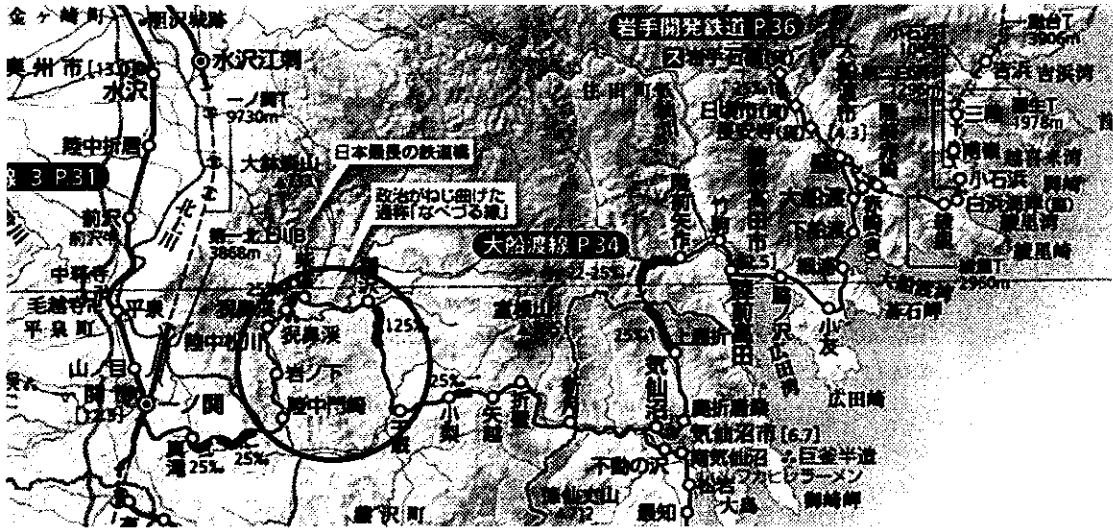
資料 21 : 原首相暗殺現場のプレート (丸印がある)



資料 22 : 当時の東京駅現場



資料 23 : 斬奸状



資料 24：大船渡線

資料 25：眠る女（竹久夢二）

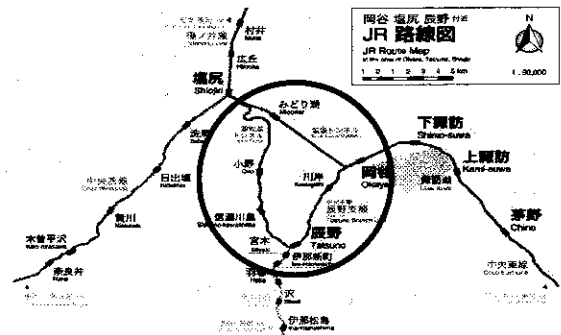


資料 28：名勝 祝鼻溪（げいびけい）



資料 26：島村抱月

資料 27：松尾須磨子



資料 29：中央本線の路線図（諏訪湖周辺）

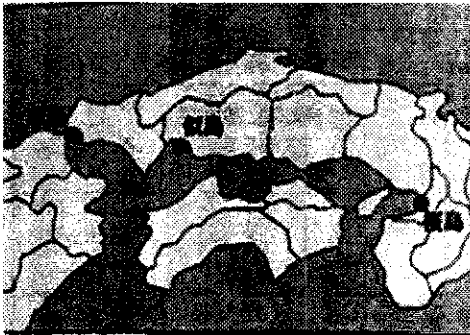




資料 30 : 腰越荘の書齋 (記念館に移築)



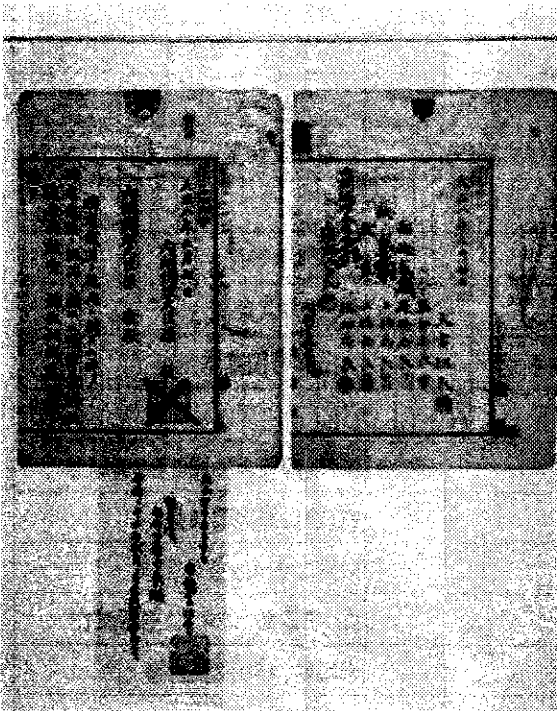
資料 31 : 原敬日記



資料 32 : 3つの検疫所



資料 33 : 似島検疫所



資料 34 : 鉄道院申請書



資料 35 : 帝都復興計画第一案

原敬の経歴				
西暦	元号	年齢	出来事	参考
1856	安政3		盛岡藩士の家に生まれる	
1867	慶應3	11		大政奉還
1868	明治元	12	盛岡藩降伏、原家窮乏する	明治維新、戊辰戦争
1870	明治3	14	再開された藩校「作人館」に学ぶ	
1871	明治4	15	共懐義塾に学ぶため上京する	廃藩置県
1872	明治5	16	学費途絶えカトリック神学校に入学する	新橋―横浜間鉄道開通
1875	明治8	19	分家して平民となる『原敬日記』を書き始める	千島樺太交換条約
1877	明治10	21		西南戦争
1879	明治12	23	賄征伐事件で退校、郵便報知新聞社に入社する	
1881	明治14	25		明治14年の政変
1883	明治16	27	中井弘長女・貞子と結婚、天津領事として赴任	
1885	明治18	29	パリ公使館勤務となる	
1889	明治22	33	帰国して農商務省参事官となる	大日本帝国憲法発布
1895	明治28	39	外務次官となる	下関条約、三国干渉
1897	明治30	41	大阪毎日新聞社に入社、翌年社長就任	
1900	明治33	44	政友会入党、第4次伊藤内閣の逓信大臣となる	立憲政友会創設される
1902	明治35	46	盛岡市から衆議院議員に初当選	
1904	明治37	48		日露戦争勃発
1905	明治38	49	貞子夫人と離婚	ポーツマス条約
1906	明治39	50	第1次西園寺内閣の内務大臣となる	大日本帝国憲法発布
1908	明治41	52	菅野弥太郎の長女・あさと再婚する	
1912	大正元	56		第1次護憲運動起こる、清朝滅亡
1914	大正3	58	第3代政友会総裁に就任する	第1次世界大戦勃発
1915	大正4			対華二十一条の要求
1917	大正6	61		ロシア革命、ロマノフ王朝滅亡
1918	大正7	62	原内閣成立する	米騒動、パリ講和会議
1921	大正10	65	11月4日東京駅にて凶刃に倒れる	